季刊

直江の津

◉かみえちごを考える◉

通巻28号

冬号

2007-8

12,1,2月

《桑取谷から見えてくる農業とは》

安全安心な農作物の供給のために環境に優しい農業を求めて

上越市における東京農大の取り組み

巻頭エッセイ◉このまちのこと

直江津ことば

配流800年　親鸞の風景

ゐなかの人々と親鸞5

【文学の旅】

「北游日乗」の旅

「山椒大夫」の道

季刊 直江の津 第28号 冬号
2007・08―12・1・2

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
直江津ことば　松川ケイ子　3

■配流800年 親鸞の風景
連載7　ゐなかの人々と親鸞5　松野純孝　4

■特集
安全安心な農作物の供給のために
環境に優しい農業を求めて　藤本彰三　8

■文学の旅
「北游日乗」の旅「山椒大夫」の道　22

■地域ＦＭ放送の試み
わが街にラジオを！　森田君夫　16

■カメラの眼　18

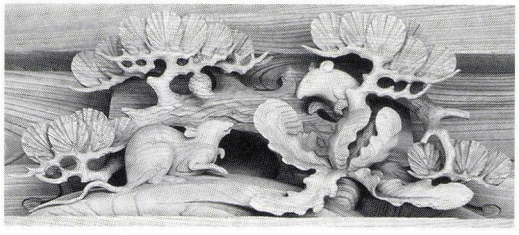
■読書びと
石の肺　佐伯一麦著　29

■建物さんぽ　24

■アルバムの一枚　30

■上越信用金庫 上越産業振興研究所レポート　26

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



五智国分寺三重の塔

♣巻頭エッセイ
松川ケイ子さんのこと

昭和15年(1940)、直江津・四ツ屋区生れ。
直江津小、附属中、高田高校を経て共立女子大学文芸学部卒業。
東京・埼玉の個人商店やスーパーのPOP、手書きチラシ、ロゴ、マークのデザインなどを多数手がける。
昭和46年、上越市誕生に伴う市章のデザイン（公募・採用）、デュオ・セレッソのネーミングとロゴ、マークデザインも松川さんの作品。
上越市北城町在住

直江津ことば

松川ケイ子

直江津のど真ん中に生れ育ったが、この三十年近くは関東暮し。ようやく、おととし、夫のふるさとの高田に落ち着いたばかりだ。

先日、かねてより気になっていた冊子「直江の津」の全バックナンバーを手に入れた。これを隅から丹念に読み、時に検証していく。今のひそかな楽しみである。

初年度の冬号に、古老が直江津の昔を語る記事がある。そこここにあふれる「直江津ことば」。思わず快哉を叫ぶ。

中でも宮崎翁は飾らない。昔のはやりことばに「ヒヤヒヤ、ノーノー」というのがあったことに言及して、「それをよく知らんで、『ヒヤヒヤ』せわんからならんどこで、『ノーノー』せっちゃった。みんなに怒られて、くらすけられたこてね（笑）。」

鉄道の駅が出来て、直江津と春日新田間が料金二銭。子どもだった翁は「二銭で鉄橋渡られんなだねかね。それがおもしくて、銭ためて汽車に乗ったもんだわね。」

ゆっくり読むと、言いまわしもアクセントも、記憶の底からじわりと蘇ってくる。幼い日、町角でよく耳にしたあの響き。そして在りし日の父のことばであり声なのだ。

直江津で九十五年間暮して来た父が他界したのは、私が高田へ戻って一年目だった。

基礎は百年も経過したという老朽化した家にとり残された母は、未練を断ち切るように、古家の解体と土地の売却を決めた。

一年後には、樹齢五十年余の桜だけが、ぽつんと道端に残り、更地は新所有者の駐車場に変わった。風が吹き抜けてゆく。これでよかったのか。母には言わなかった一瞬の悔恨が胸の奥を刺す。来春も、また次も、ずっと花を咲かせてよ、と老いた桜に祈る。

うつうつとした気分をはね返したくて、最近、直江津の小さな合唱団に入った。

そこで、飯吉馨作曲の「ブルース・フォ・クビキ」という歌に出合う。「おまん、せってきない～」「おら、やだわね～」。土地ことばのかけあい。歯切れのよいジャズピアノにのってスウィングすると、いつのまにか笑い顔と手拍子でいっぱいになる。遠い昔に忘れてしまったふるさとことばの歌を、私はまだ少しぎこちなく、はにかみながら、今日も歌う。

配流八〇〇年

親鸞の風景

●連載7（最終回）

みなかの人々と親鸞5

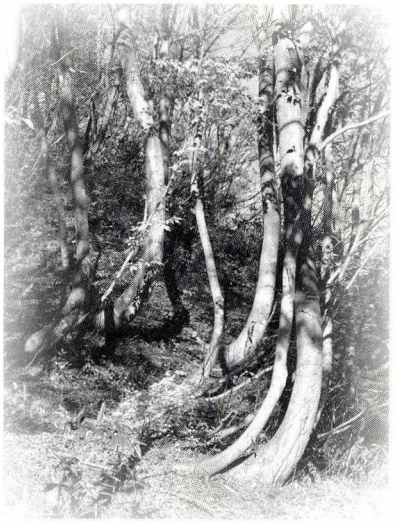
―真宗の修行―

松野純孝

九歳の春、比叡山に入った親鸞は研学と修行にはげんだ。が、やがて後世のたすかる道を求めずにいられなくなった。けれども比叡山の天台仏教はこれにこたえてくれなかった。この後世のことに悩みに悩んだ親鸞はついにたまりかねて、山を出て、当時聖徳太子創建と伝える京都の六角堂に百日の参籠に入った。当時の記録によると、参籠は多くは三日間とか五日間であって、百日参籠はきわめて珍しかった。それを親鸞は百か日の参籠。すっかり行き詰って余程切羽つまっていたにちがいない。参籠して九十五日のあか月、聖徳太子のご示現にあずかり法然をたずねた。法然の所へは六角堂百日の参籠と同じく亦百か日、降るにも照る時も大風のときも一日も欠かさず通いつづけた。親鸞は理づめで納得できぬものは受けることができない。法然のとなえる専修念仏が何故、当今最もすぐれたものなのか。なぜか、なぜか、の問い詰めの毎日であった。それに対する法然の答えは、ただ念仏、ただ念仏しなさい、であった。理由は微塵もこたえず、ただ念仏、ただ念仏の毎日だった。来る日も来る日もただ念仏、だった。法然はただ後世のたすかることは、善人であろうと悪人であろうと差別なく、平等に生死の迷いを出ることのできる道を、ただ一筋に説いたのを親鸞は承り、これこそと心に定めてしまったので、たとえ法然上人にだまされて地獄に堕ちても後悔しない、とこれまでの雑業を棄てて法然の唱える弥陀本願の専修念仏に帰した（回心）のである。

法然の専修念仏は善悪を選別せず、従来の差別でなく、平等の教えであり、ただ念仏、と来る来る日も唯一筋に説いたという、如何にも法然の真面目が妻恵信の書状によく書かれている。

親鸞は信の獲得には、次の二つの不可欠なことを『教行証』で『涅槃経』の文を二回引用している。すなわち「聞」と「思」、「道有ることを信じ」と「得道の人有ることを信ずる」の二つである。親鸞は出家以来、聞に精進した。しかし、生きる上での思＝問いがなければ信不具



風雪に耐えるブナの木

足。だが親鸞は後世のたすかる問い(思)を持っていた。またもう一つ、専修念仏という道あることとその道を体得した得道の人あること＝法然を、たとえだまされ地獄に堕ちても後悔しないと信じ切ったところに回心したのである。法然のただ念仏とは何の理由づけもないことである。その理由づけを求めての親鸞の何故か、なぜかの質問に法然はただ念仏、ただ念仏、と答えたのである。親鸞はこの回心(二九歳)後、十三年の四十二歳(建保二年)、一家が東国移住の途上、群馬県佐貫で三部経千部読誦をはじめ、四、五日で念仏の信心よりほかには何事か心にかかるべき、名号(南无阿弥陀仏)のほかには何事の不足にて、と思い返して経読むことは止め常陸へ。それから十七年後の五十九歳(寛喜三年)、またしても大経を讀むことひまもなしで、念仏の信心、名号のほかには何事か不足かと思い返し、八日目の同年四月十一日、「万ハさてあらん」と大経讀むことを止め、以後この不足に終止符を打ち、人の執心、自力のしんから脱することができた。即ち、ただ念仏の人となったのである。こう恵信は記している。この建保二年、寛喜三年という年は全国的大飢饉で有名な年で日蓮の遺文によると人間の死肉が市場で賣られていたという。このような大飢饉には朝廷や幕府では全国の寺々に経典の讀誦によるご祈祷を依頼した。この飢饉には地頭は山菜や、河や海で魚や海藻を取ることを禁じた。これでは貧しい人たちが生きる術がない。専修念仏の正機である直接生産者の愚かな貧窮の多くの人達は飢饉と連動する悪疫に血を吐いては死んでいった。この惨状をまのあたりにした親鸞がただ念仏でよいのか、ついつい三部経千部とか大経の讀誦となったのであろう。このことは後述の文応元年の消息で察知される。ではそのようにばたばた死んでいく飢饉、悪疫に耐えうる、ただ念仏とは一体どういうことなのであろうか。

浄土門の修行は、愚癡にかへりて、極楽にむまると云々。

この言葉は親鸞が師法然の思想と行動を集録した『西方指南抄』下本にあり、法然の法語『浄土宗大意』の最後に記されているものである。この一文だけを取ったものだから、伝法然書篇の中に「一枚消息」として昭和新修法然上人全集に収められている。

この法語は親鸞・恵信・尼覚信・覚恵・覚如・存覚らに伝持されてきたようである。普通、修行といえば極寒の中、滝に打たれるとか、腕を焼いてその油を仏の灯明の用にするとかが浮ぶ。ところがここでは愚癡にかえる意にしている。一体これはどういう修行なのであろうか。

文応元年十一月十三日(善信八八歳)の消息で親鸞は法然の「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」という言葉を引用し、自分が法然門下の吉水時代に、法然がものもおぼえぬあさましき人々が参ってくるのをご覧になっては、必ず浄土に往生間違いない(往生必定すべし)とほほえまれるのを見たことだった。一方、ふみ沙汰、学問沙汰していかにも賢こぶった人々の参ったのをば、浄土に往生することはどうであろうか、と申されるのを確かに承った。それから五十年余りもたった今に至るまでおもいあわせられると言っている。あさましき愚者は往生必定、学問沙汰する賢者は往生不定という法然の言葉の再確認である。

この消息は『末燈鈔』六に収められ、常陸の門弟乗信御房にあてられたもので、次のような文からはじまる。

なによりも、こぞ・ことし、老少男女おほくのひとぐ〳〵のし(死)にあひて候らんことこそ、あはれにさふ

らへ。たゞし生死无常のことはり、くはしく如来のときをかせおはしましてさふらふうへは、おどろきおぼしめすべからずさふらふ。まづ善信が身には、臨終の善悪をばまふさず、信心決定のひとは、うたがひなければ正定聚に住することにて候なり。されば こそ愚癡无智のひとも、おはりもめでたく候へ（中略）。かまへて学生沙汰せさせたまひ候はで、往生をとげさせたまひ候べし。

文中、こぞ（去年）に当る正嘉三年の前年である正嘉二年、ことしの文応元年は諸国飢饉人民病死の年であった。幕府は人庶疾疫対治のため諸国の寺院に大般若転勝仁王経など転読せしめようとしていた。日蓮もこの文応元年に撰述した『立正安国論』の冒頭「近年より近日に至るまで天変地夭飢饉疫癘遍く天下に満ち広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え」と書きはじめている。この消息は正嘉・文応年間の飢饉と悪疫による同朋同行の老少男女多数の死を報じた乗信の書信に対する返書であろう。ここで親鸞がまず臨終の善悪をば沙汰せずという。同朋同行たちは臨終正念どころか一声の声明念仏さえできず、或は狂い、或は血を吐き、見るに耐えぬ无惨な姿で次から次とのたうちまわって斃れていかねばならなかった。この現実を目撃して、かかる臨終の悪相で果たして往生できるかと乗信は問いただしたのに対する親鸞の返書であろう。親鸞はここで法然の「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」という言葉を書きつけ、学生沙汰は往生不定、あさましき愚者は往生必定を断言したのである。が、この消息には親鸞の言い訳がまだ見える気がする。

この親鸞の消息をみた日蓮研究の友人は、親鸞が乗信になぐさめる言葉もなく、いきなり「生死无常のことはり、おどろきおぼしめすべからずさふらふ」とつきつけるような親鸞は日蓮と対照的だという。日蓮は弟子達の窮状には、それに対する処し方を懇切に一々指示しているからという。親鸞が人間の八苦中、愛別離苦は最も切である。そのようなとき、

かなしみにかなしみをそふるやうにはゆめ〳〵とぶらふべからず。もししからば、とぶらひたるにはあらで、いよ〳〵わびしめたるにてあるべし。酒は忘憂（ウレヘヲワスル）の名あり、これをすゝめてわらふほどになぐさめてさるべし。さてこそとぶらひたるにてあれとおほせありき。（『口伝鈔』一七・一八）

亀井勝一郎さんは親鸞のこの言葉の繊細な心遣いに感嘆しておられた。親鸞は乗信のいやしようのない悲嘆に、悲嘆を更に増大させるような慰めの言葉を排して、生死無常のことわり、で断じたのにちがいない。

親鸞がこの消息より一年前の十月廿九日、高田の入道殿への御返事（真蹟）では、高田入道から覚念房の往生を知らされ、それに対して切々とした哀惜の情を書き記している。人間親鸞その人を知る絶好の史料である。親鸞はまた愛別離苦にあって父母妻子の別離を悲しむとき、仏法者で念仏する人は、人目も憚らずみっともない格好で嘆き悲しむことはあってはならない。威儀を正そうと毎事勇猛の振る舞いでなければならぬといさめる。これは浄土真宗のこころをわきまえぬ虚仮である。「うちまかせての凡夫」ではないかと親鸞は言う。悲しかったら人目もかまわず泣きたいだけ泣くがよい。「うれへをわする」という、忘憂の名ある酒をすすめて悲嘆にくれている人が笑うほどになぐさめてさるべしと。この忘憂の名ある酒をすすめ、憂いを忘れて笑うほどになぐさめてさるべし、の言葉はすばらしい。「酒はこれ忘憂の名あり」はま

たいい。それにつけても、「かなしみにかなしみをそふるようにはゆめ〳〵とぶらふべからず。もししからば、とぶらひたるにはあらで、いよ〳〵わびしめたるにてあるべし」という言葉に私はしばし、言葉をうしなった。こんな悲しみの言葉を私は知らなかった。私達の弔い方は慰めの言葉だ。それはかなしみにかなしみをそえるものでしかないのである。一体、親鸞はどんな悲しみの原体験を持ってこんな言葉を発見したのだろうか。私はその原体験ともいうべきものは、ひとつには既に述べたように貧しく愚かで何の思慮分別もない、体面も、何の弁もないゐなかの人々の愚癡に同じたところから発見したのではないかと思うのである。

法然が八十年の生涯を回顧して述懐した最後の「一枚起請文」にはこう結んである。法然一代の説法のとどのつまりは、

念仏を信ぜん人は、たとひ一代の御のりをよく〳〵学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじくして、智者のふるまひをせずして、たゞ一向に念仏すべし。

ただ念仏とは智者の振舞いをせずして愚鈍の身になして、無智のともがらに同じくなることという。野間宏さんは「農民と同位の自己をつくりだす」こととおさえておられる。また覚如の子存覚は「身を田夫野叟の類に侔しくせんと欲す」ることとした。農民運動で著名な杉山元治郎さんが農民を訪ねられたところ、農民にとって一番ご馳走のお風呂に案内してくれた。当時みんな貧しい農民は貰い風呂だった。ところが臭くて入れるものではない。風呂の中で垢をこすって一週間も貯め、いい肥しにする。異臭を放つほど良い肥しなのだ。それを、本当にいいお風呂でございましたと言えぬようでは農民の心はわからんのだと。いいエピソードだ。また真宗中興とされる蓮如はゐなかの御門徒の中へ行ったら、御門徒の食べているもの(文字通りの粗食)を自分も食べたいと言えと。田夫野叟の類と身を侔しくする。これが真宗の修行なのである。

かつて旧制高校生の私達は倫理学の根本問題として感情移入という言葉をよく口にした。この語は人の身になってみるともいわれ、真宗の修行の入口に近い。

法然の弟子証空は、大乗のさとりに深い理解を持ち、戒を守ったりして念仏のいろどりをしようとするのは自力であり、他力の念仏はそうしたいろどりの一切しない白木の念仏を力説した。法然も「念仏はまたく(全く)風情もなし、ただ申よりほかの事なし」といろどりしない、全く風情もない念仏といった。

親鸞は自力とは「みづからがみ(身)をよしとおもふこゝろ」と喝破した。自力とは自己をよしと評価すること。そこで自力の人は智恵もすすんでゆくと自分ほどの智者、行者はあるまいと思い、自分を上げて評価し、他人を見下すのである。憍慢と卑下である。現代は競争社会。正しく憍慢と卑下の社会。どこに安穏な世界があるのか。法然・親鸞は言う。「念仏はやう(仔細、理由づけ)なきをもてなり。名号をとなふるほか、一切やうなきこと也」。ただ念仏。知的理由づけして自己をいろどり、風情あるものとすることを拒むのだ。八木誠一『愛とエゴイズム』は、「分別知はエゴイズムと内的に結合する」と。親鸞が「智愚の毒」と言っている。その意味が私にはよくわからず、私の課題である。

仏教学者／上越教育大学名誉教授・元学長　上越市牧区東松ノ木・一念寺

桑取谷から見えてくる農業とは

安全安心な農作物の供給のために環境に優しい農業を求めて

●上越市における東京農大の取り組み

東京農業大学教授　藤本彰三（ふじもとあきみ）

本稿は上越なおえつ信金倶楽部における講演を編集部の責任において抄録したものである

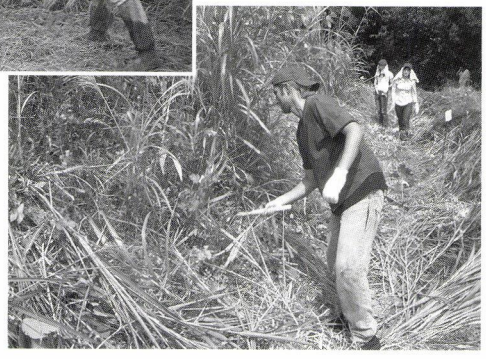


学生実習
（緑肥刈りを終えて）









上　山羊放牧による耕作放棄地の再開発実験
中　小型機械で零細圃場の稲刈り
下　学生の草刈り（鎌を鉈のように使用してしまう）

藤本　彰三　ふじもと　あきみ
東京農業大学教授
国際協力センター所長
国際食料情報学部　国際バイオビジネス学科教授
上越市荒町出身
高田高校　東京農業大学卒
平成17年から上越市桑取地区で農薬を使わない新たな有機農法の確立を目指して実験を継続。野菜を直江津の朝市での販売やアルルン畑にも出荷。中山間地農業に高付加価値を生み出す振興を目指し、今年の冬までに地域の出資者を募って株式会社の設立を計画。

はじめに

私は高田出身で、高田高校、東京農大を卒業後30歳くらいまで海外に留学していました。帰国して大学に奉職し、今日に至っております。専門は農業経済学で、とくに東南アジアを中心とした発展途上国の貧困問題、農業開発のための調査研究をやってまいりました。私の生家は第二種兼業農家で三反歩ほどの田んぼを持っていました。子供の頃に家の田んぼ仕事を手伝っただけで、地元の農業については勉強する機会がありませんでした。それが、十年ほど前から上越農協にお願いして、学生の農家実習を行うようになり、毎年引率して帰省するようになり、また、上越市から委託を受けて地元農業の調査研究をするようになって、振興方向について考えながら今日に至っています。

本日は、「東京農業大学の取り組みについて」という演題で、上越市で東京農大がどういう考えで何をやっているかということをお話しようと思っています。


力任せの留学生


東京農大名物「だいこん踊り」

東京農業大学の沿革

東京農大は、明治24年に榎本武揚が創立した学校が始まりです。榎本武揚は幕臣で函館戦争の指導者の一人ですが、優秀な人であるということで明治政府に登用され、外務大臣や商工大臣などを歴任しました。日本で一番古いのは札幌農学校（北海道大学農学部）で、２番目が駒場農学校（東京大学農学部）です。３番目が徳川育英会育英黌の農業科（東京農大）で、116年の歴史があります。

札幌農学校と駒場農学校は、明治政府が役人、技術者を育成する目的で設立した学校ですが、徳川育英黌は私立の旧徳川幕府の子弟教育を目指した学校で、その後は地方地主の子弟教育を行ってきました。「人物を畑に還す」をモットーとしてきました。大正15年の旧大学令で東京農業大学になり、北海道大学、東京大学、京都大学、九州大学の旧帝国大学と並んで、戦前から農学博士号を授与できた唯一の私立大学です。

現在、５学部19学科、大学院は２研究科、短期大学部４学科があり、兄弟大学として東京情報大学があります。全体を学校法人東京農業大学が経営しています。東京農大の学生数は１万３千人に達し、国内最大の農学教育研究機関です。30カ国と地域から300名以上の留学生を迎え入れ、「人物を世界に還す」がモットーで、食料・環境・健康・バイオマスエネルギー分野で人類の繁栄と平和に貢献しています。世田谷キャンパスを中心に、厚木市と北海道網走市にキャンパスがあります。

上越市での東京農大の取組み

上越市との最初のつながりは、平成七年から上越農協の協力を得て始めた学生の農家実習です。最初は農業経済学科の二年生を連れて来ましたが、平成十一年からは生物情報学科（十七年から国際バイオネスビジネス学科と名称変更）の学生を連れて来ています。当初は一週間でしたが今は二週間くらい実習しています。また、今年から谷浜桑取地区で実施している研究プロジェクトサイトでの実習を加えて、二つのタイプの学生実習を同時進行で進めています。

私は七月二七日から上越に来ていますが、学生はすでに三つめのグループが入って桑取にいます。私も学生と一緒に寝泊りしています。朝早く皆を起こして朝飯を食べさせ、畑で野菜の朝採り作業をさせ、朝市へ行って売るような販売実習もさせました。お盆前後に八回くらいやりました。八月末には農協にお願いする学生がまた十人来ます。この夏休みだけで三五名くらいの学生が上越に来ますので、上越の理解を深めてくれればいいなと思っています。

このような縁で、平成八年から五年間、三つの違うテーマの研究が市から委託されました。いい機会を頂いたということで、大学の専門の異なる人たちを動員し、何回もこっちへ来て、あちこち飛び回って調査研究をしました。その仕事の中の一つに「景観」がありました。当時は合併前ですから平場と言うと東頸城の方で、中山間地と言うと桑取方面ですが、造園学科の景観の専門家に来てもらいました。はさ木を並木として道に取り入れる、それもハンノキではなく頭が丸くなるタモの木が非常に景観としてはおもしろいので、上越特有の景観が作れるはずだという提案もしました。シュミレーションで写真を見るとすごく立派に見えました。それと同時に桑取も回りました。桑取谷は綺麗なとこですが、屋根の色が景観としてはあまりよくないなという意見もありました。

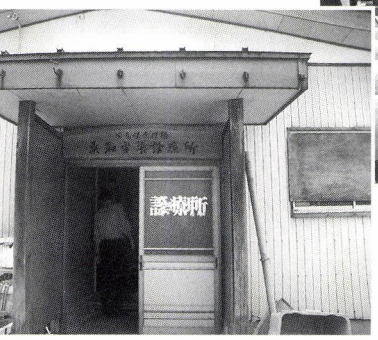
「農都市」条例への取組み

食料農業農村基本条例、いわゆる「農都市条例」を上越市が作ったのをご存知だと思います。国が平成十二年七月に、一九六一年に施工した農業基本法を改めて農業の新しい憲法「食料農業農村基本法」を制定しましたが、それを受けて、全国で一番早く市としての条例を作ったのが上越市です。その時の検討委員会の委員長が松田藤四郎農大学長（当時）で、私も委員として素案作りに協力しました。

このとき、上越市は独自性を出そうと思い、環境に優しい農業の方向性を議論しました。「有機農業」と言う言葉を条例の中に入れたいと松田先生も私も考えました。消費者の方はもちろん賛成ですが、農業関係の人たちから「難しいよ」という話が強く出ました。「無化学肥料」とか「無農薬」ということになると「そんなことといっても難しいんだよ」ということで、なかなかまとまりませんでしたが、なんとか前文に「有機農業」という言葉を入れることができました。引き続き「農都市条例」に基づいて政策審議会が立ち上がり、その委員を三期六年やっていましたが、今年からは柿崎出身で准教授の新部先生に審議会の委員を替わってもらいました。

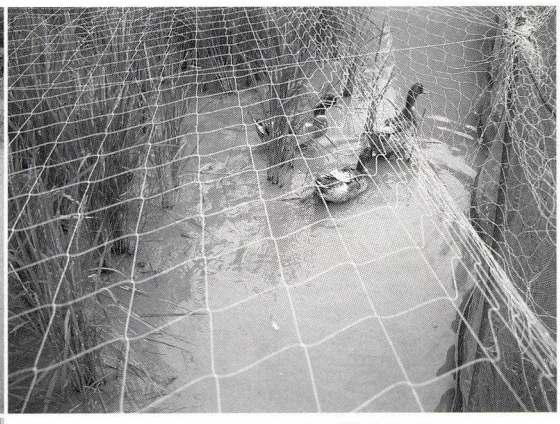


木浦市長と進士前学長が協力協定に調印する

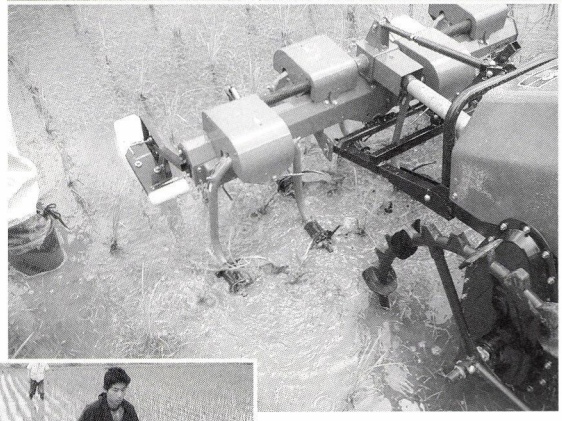


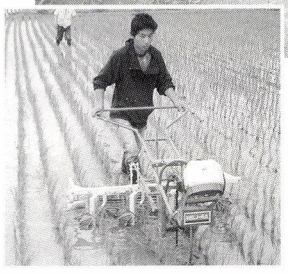
旧桑取診療所を上越事務所として借入れる





アイガモによる水田雑草管理





上　紙マルチ直播き栽培の実験
中・下　小型除草機

国際学術フロンティアの取組み

前後しますが、平成十七年の四月に木浦市長さんと当時の進士学長が協力協定を結びました。ちょうど文部科学省の補助金を受けて共同研究を実施中でした。これは農大にとっては最大の研究プロジェクトで、私が研究代表者になっています。

これは五カ国六大学の国際共同研究で、ペルーのア・モリーナ大学、インドネシアのボゴール農科大学・ウダヤナ大学、ベトナムのハノイ農科大学、タイのカセサート大学、そして東京農大です。研究者数は50人以上の大規模プロジェクトです。この共同研究で我々が考えているのは、化学合成資材に替わる素材を開発しようと言うことです。例えば「農薬を撒くな」と言っても、それでは「害虫はどうするんだ」という質問が必ず出ます。「化学肥料は使うな」と言っても、「収量が下がったらどうしてくれるんだ」と言う問題も起こります。

それに替わる農薬、代替資材と呼びますが現時点ではなかなか良い物がありません。そこで生物に由来する農薬、生物農薬を開発しようということです。一番分かりやすいのは天敵です。自然界にある別の虫を利用して、虫に虫を食べさせると農薬を使わないで済むわけですが、ハウスの中ならともかく、空の下で虫を放しても逃げてしまうので、なかなか簡単にはいきません。このように天敵もハウス農業については開発が進んでいますが、外でやるのはなかなか難しいのが現状です。

また微生物を利用して草を枯らし、他の動物や虫が来ないようにするとか、植物が持っている活性物質を使って「忌避効果」と言いますが、臭で虫が寄らない、あるいは殺すというような植物源農薬の製品化を試みています。

インドネシアでは、かなりいい成果が出ており、いくつか特許も取っていますし製品化した物もあります。「それじゃあ」っていうわけで、日本に持ってきてばら撒くこともできません。インドネシアの物はインドネシアで使う、日本の物は日本でと、生物の場合、国際間の移動が非常にやかましい。

このようなことは、研究室の実験である程

雪解け直後の耕作放棄田
（夏には雑草が繁茂する）



度の成果や方向性が見えてきても、実証しなければ意味がないので、実際の農場で実用化試験をやらなければなりません。ちょうど平成十六年度から研究の第二期に入り、谷浜桑取地区を実用化試験のフィールドにしようということにしました。

何軒かの農家から水田を借りて、十七年から栽培実験をやりました。「有機栽培の実験をしたいので土地を貸してもらえませんか」とお話をすると、有機栽培というと草が生える、虫が来るというイメージがありますから、「俺はいいとしても回りの人に迷惑をかける」と心配されました。幸い、桑取には隠れ田みたいな田んぼがあり、ここなら誰にも迷惑をかけないだろうということで、小さい田んぼ三枚を借りて稲の実験を始めました。予期したとおり草がいっぱい生えました。水田を貸してくれた地主さんは内心は心配していたのだろうと思いますが、あんまり文句もいわずに協力してくれました。その実績を踏まえ、徐々に面積を広げて今年は三年目の栽培実験をやっています。

このような学術フロンティア共同研究のサイトをなぜ「桑取」に置いたかが実は重要なポイントです。海岸から桑取川に添って十二キロ上流に、最後の集落横畑があって、「くわどりゆったり村」があります。その上には集落がありません。桑取川の水は南葉山系の雪解け水が流れてくるもので、上流からごみが流れてくる心配は一切ありません。皆さんが飲んでいる上越市の上水道の源になっています。

ここでは昭和三十年代に開拓事業が行われ、「ゆったり村」の少し上へあがったところから、名立と桑取を分ける尾根の桑取側に十五キロの用水路を建設しました。一番最後が吉浦、茶屋が原です。上流から尾根の上を流れて来ていますから他の水は混ざっていません。合計二〇〇ヘクタール近くの農地、水田と畑が半々くらい、が造成されました。しかし現在は、三〇パーセント以上が耕作放棄されています。山地ですから作業が非常にやりづらいし、面積が小さいから大きな機械が入らない。そして高齢化が進んで後継者がいない。頼もうとしても誰もやり手がいないということです。

この六〇ヘクタールに草が生え、潅木が生えているという状態です。米が足りない食料が足りないと、長年の夢であった潅漑用水を通して、ようやく稲ができるようになったのに、わずか二十年か三十年で「やめた」と言って草ぼうぼうになっています。これはもったいない、あるいはこれでいいんだろうかと考えさせられます。

桑取にはこのように中山間地が抱えている大きな問題がたくさんあります。それと同時に、南葉山から出てくる水には他のところからごみが入る心配が無く、一つの閉鎖的な生態系になっています。このことは、将来、桑取谷全体の二〇〇ヘクタールが全て有機農業に変わり得る可能性を持っていると考えました。

上越の平場の田園地帯は何千ヘクタールもあり、農業をやるには機械もでかいし農道もきちんとしているし便利はいいのですが、水源は妙高で途中に生活排水や工場排水が入ってきます。環境と密着して、環境をそのまま

桑取開拓パイロット事業
山間地域における自立経営農家を育成するための農業構造改善推進事業として、桑取地区の山林地帯を農地化する「県営パイロット事業」が昭和28年から実施された。

開拓地域面積	411.7ha	
農地造成面積	田	72ha
	畑	111ha
	採草地	182ha
総事業費	341,507,000円	







上　ハウスでは冬季に新鮮野菜の供給を計画している
中　有機野菜栽培実験で学生の作業風景
下　有機野菜栽培実験圃場

利用してやれる農業を考える場所としては桑取谷は最高の場所だと思いました。

ただ現在では東頸城の中山間地も上越市内に入っていますので、もっと他にいい場所があると言えるかもしれませんが……。

有機米栽培というのは簡単にいえば、堆肥を使い、化学肥料は使わないということです。化学合成農薬も一切使いませんので、有機米栽培の一番の問題点は除草です。雑草をどう退治するか、あるいは草とどのように一緒に生きるかということです。低コストで手間のかからない除草技術を開発できれば、無農薬・無化学肥料の稲作が一般化するだろうと考えています。

現在、桑取では水田の雑草関連技術に力点を置いて、四通りくらいの方法を実験しております。一つは、田んぼに合鴨を放して雑草を食べさせる雑草管理方法です。今年、合鴨のはずなのに飛んで逃げていくという、笑ってしまうようなことがありました。これはマガモの血が濃すぎたんだろうということです。

二つ目は、紙マルチの方法。幅が一・二メートル、長さが一二〇メートルくらいの巨大な再生紙の黒いロール、巨大なトイレットペーパーだと思えばいいのですが、手あるいは機械で引っ張って水田全面を覆います。黒いから光を通さないので雑草は芽を出しません。その上に田植えをします。これを紙マルチ田植と言います。この紙マルチに種モミを付けて、田植えをしないでいい「紙マルチ直播き」というやり方もあります。

三番目は、水田の水を深く保ち、米ぬかを撒く方法。米ぬかを撒くと濁りますから光りを通さないので草が出ない。水を深く保つことによって草を押さえる深水管理という技術の体系があります。

最後は機械除草です。条間をゴロゴロ押していく昔の除草機は株と株の間はだめですが、今の除草機はこれができるようになっています。日本の技術はすごいなと思います。

野菜もいろいろやっています。枝豆、南瓜、ズッキーニ、クイシン菜、スイカ。全部有機栽培をやっております。肥料も比較研究していますが、イセグリーンという鶏糞の堆肥が枝豆などの糖度を非常に高くする。つまり甘くするということが分かってきました。

輪作体系の確立の試験も平成十八年から始めました。耕作放棄地の棚田があまりにも状況が悪く、トラクターが入る状態ではないので、ブルドーザーやユンボなどの重機を入れて再開発作業をしましたが、お金もかかるし簡単にできないのでヤギや羊を放して草を喰わせようかということで試しにやってみました。

雑草のバイオマスを測っていて、一・二ヘクタールで、十二頭のヤギ・羊たちが喰った草の量が、一カ月間で一〇アール当たりに換算して六トンのバイオマスになりました。小さいうちに食べていますから六トン分が腹の中に入ったのではなく、六トンのバイオマスになる草を食べたということが数字的に分かってきています。そのヤギ・羊のフンが土地を肥やしてくれます。このようにして無肥料でやれる畑作を考えていますが、草だけで何も餌をやっていませんので、あまり栄養がありませんので、まだ畑作に堪えるだけの土地になっていません。作物を入れるのは来年あたりにしようかなと考えています。

別のグループには昆虫を専門にして天敵の可能性を追っかけている人がいます。もちろん益虫も含めてモニター調査しています。また土壌検定ということもやっています。



上　耕作放棄地で雪下野菜栽培実験
下　一部に小麦栽培実験（失敗例）

東京農大ブランドにむけて

これが一番面白いと思いますが、技術普及と共に協力農家との共同販売を考えています。将来的には「じょうえつ東京農大のお米」とか、「じょうえつ東京農大の野菜」というブランド化を計りたいと考えています。中山間地の農業にいかに付加価値を付けるか、それには有機栽培で東京農大というブランドを前面に出して商品として全国的にも売れるようにしたい。地産地消という精神から、まず地元で消費してもらい、余裕があれば全国展開をするということになるわけです。

東京農大だからといって農大の農場だけでやると、桑取谷の二〇〇ヘクタール全部を農大がやらなければならなくなるので、是非一緒にやろうという農家の方々と大学直営農場との契約栽培を考えています。技術を同一にして、生産物は「じょうえつ東京農大のお米」、「じょうえつ東京農大の野菜」というブランドで共同販売できる。農協やその他へ出すよりも少しでも高い値段で売るシステムを考えれば、もっと協力してくださる人たちも増えるし、ブランド化も進むと思います。こういう経営実験もいま実施しています。

株式会社じょうえつ東京農大

今までお話しをしてきた桑取での研究プロジェクトを踏まえて、桑取谷を中心とした有機農場を立ち上げ、環境に優しく健康に優しい農業、食料を生産して地元の人たちに提供する会社を立ち上げたいと計画しています。

東京農大は厚木や富士、北海道、あるいは沖縄に農場を持っていて、学生実習や栽培実験をやっていますが、農業経営をやるような農場がありません。そこで、今まで研究した技術を実用化して実際に農産物を生産するような場所、あるいは学生たちが勉強したことを実践してみる場所として桑取プロジェクトの延長を考えています。そして「農大ブランド」化を計っていくような場所にし、それを通じて地域振興・社会貢献を実践する農場として位置づけたいと考えております。

株式会社として独立した組織にし、学校法人、大学関係者、我々を含めた教授陣も個別に出資する予定です。すでに地元の経済界の人たちにも発起人になっていただいており、また地元の地権者、あるいは土地改良関係者も出資してくださるということになっております。

また、一般市民からも出資をお願いし、大学が全部お金を出して作る会社ではなくて、大学の名前は使いますが、大学と一緒に地元の人たちが協力して、環境や健康のためになるような物を作り、それが日本の農業の将来、中山間地問題など、問題はいっぱいありますから、そこに新しい方向を出せるようなものにしたいと思っています。

なぜ株式会社かといいますと、法人でも農業やれるようになりましたから、法人で経営した方が規模をどんどん拡大できるようになります。桑取の二〇〇ヘクタールだけではなく名立の谷も一緒にやれるようになれば、五〇〇ヘクタールくらいになります。有機農業は健康と環境のためだけでなく、付加価値をつけるためにも有益です。また、大学がやることですから、農業関係の研修事業、食農環境事業、教育事業などの部分もきちんと入れてます。

事業内容は、現在九ヘクタールを借りていますので、計画では一〇ヘクタールから始めて徐々に拡大し、契約の部分も拡大していく予定です。米だけで会社経営するのは非常に難しいので、野菜類などの畑作類を中心とした収益性の高い作物の計画をたてています。

収支見通しについては、今やっている経営実験では今年は明らかに赤字ですし、もっと厳しい眼で見られる方もいらっしゃるでしょうけど、二、三年は赤字が続くだろうと思っています。

有機農業を実践されている方から話を聞いていると、五、六年もすると農地の生態系が変わります。それまでは非常に不安定な時期が続き、虫にもやられやすいし収量も低いのですが五、六年で安定してきて、害虫が来ても、それを食べる虫がそこに住むようになるという状態ができ上がってきます。六年間我慢できればそれなりの物がきちっとできる。経験的にそういうことが分かっておりますから、しばらく赤字が続いても必ずやれるだろうと私は確信しているわけです。

資金計画は、赤字が続くこともあって、設立したのはいいけどすぐ潰れるような会社じゃ困りますから、一応五〇〇〇万円の出資金を集めて、目途がたった段階で登記しようという考えでおります。今年中に立ち上げて、来年の農作業はこの会社の事業としてやっていきたいと考えています。

学生のためにもなるし地元のためになり、そして環境を守って良いものを供給できるような、さすが農大だといわれるようなものにしたいと思います。そのためには皆様方のご理解とご協力をいただいて、いろんなことをお教えいただきながら共に、一緒にやれる道を見つけたいと思っています。



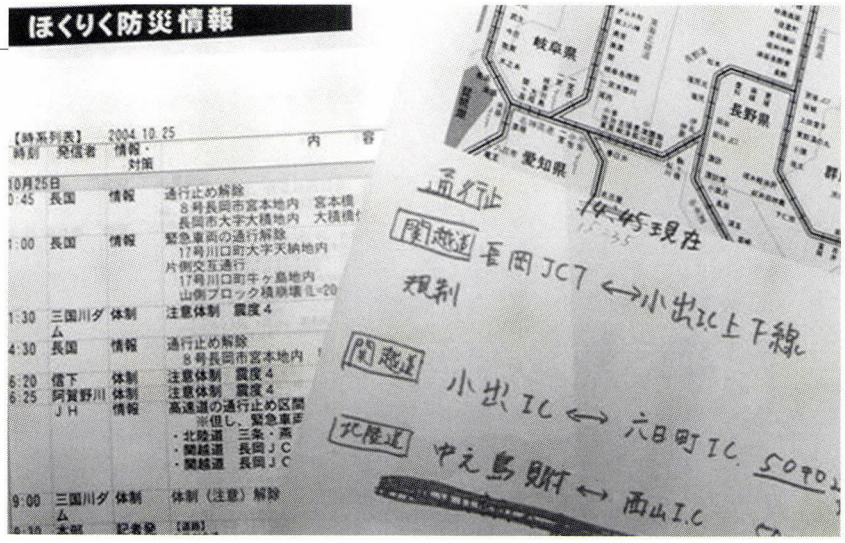
古民家で合宿中の学生と（松田理事長の陣中見舞）

株式会社じょうえつ東京農大設立に関する問い合わせ
東京農業大学　国際食料情報学部
国際バイオビジネス学科
藤本彰三　TEL 03－5477－2721

地域FM放送の試み

わが街にラジオを！FMJ

エフエム上越㈱
放送課長　森田君夫



平成七年は災害の年であった。そして一と、七は災害の数字だった。阪神淡路大震災（当初はこう言っていた）が一月十七日、あの水害は七月十一日だった。

この年は宮越市政となって二年目、市役所の把握を終えた市長が積極的に行動しようとしていた時期であったと記憶している。阪神淡路大震災では、大きな被害を受けた神戸市長田区で小さなＦＭ局が被災者のために放送を始めた、大地震から十三日目の一月三十日だった。

在日コリアンが同胞のために始めた放送は、次第に被災地に無くてはならないものとなり、地震からちょうど一年後の平成八年一月十七日正式なＦＭ局「エフエムわぃわぃ」が誕生、海賊放送は終わった。

災害時にいかにラジオが有効か全国の誰もが知ることとなり、上越市でも市民有志がコミュニティーＦＭ局設立に向け動き出す。7・11水害はラジオの必要性を決定付けるものとなり、それを認識していた宮越市長の指示のもと紆余曲折を経て、平成十一年四月三日「エフエム上越」開局、地震から四年後のことだった。資本金五千万円の内の五一％を市役所が持ち、残りを地元企業などと個人が持った。市役所のラジオという印象が当初からあった。

普段から聞いていただかなければ災害時にも聞いていただけない、コミュニティーＦＭラジオを知っていただくための地道な一歩の始まりであり、市民の税金を使う「市民のラジオ」に向けての一歩だった。幸い放送経験者がいた事もあり我々のラジオは比較的スムーズに市民に受け入れられたと自負している。

エフエム上越を聴いた事がない人のためにプログラムの一部を紹介しよう、二四時間放送でいつチャンネルを合わせても聞ける。

平日は朝五時から「元気はつらつ歌謡曲」早起きの皆さんに山川豊らが話しかける。七時からは本町三丁目のスタジオから朝の生放送「モーニングステーション」ニュースに天気予報、道路情報・声の広報・俳句紹介のコーナーもある。午前十一時からは四時間の生放送「すまいるカフェ」ニュース・天気・広報は勿論、ＮＰＯやサークル・地元著名人出演



のコーナーが一週間で十六と盛沢山。気楽に出演可能で、PR出演や見学でスタジオはいつも賑やかです。午後五時からは「イブニングじゃむ」二時間の生放送、この時間もニュース・天気・声の広報は基本。六時からは、友達の友達へと輪が広がる『テレフォンじゃむ』あなたの番はいつでしょう。その他、午後九時からはオリジナルの音楽番組、エフエム上越にダイアルを合わせてください。

さて災害時に役に立つための訓練は、机上で出来ても実際に体験しなければ分からない事が多々ある、平成十六年十月の「中越大震災」が教えてくれた。

午後六時前の地震から四五分後、スタジオから災害情報発信、市内の震度・被害状況・交通情報が主で数日間は泊まり込みでの放送であった。大被害の中越と比べれば軽微な被害でも町は混乱した、中層の集合住宅近くの避難所は不安な市民でいっぱいになった。

余震の多さも経験のないもので、数日後に起きた大きな余震は、子ども達が学校や保育園・幼稚園に行っている時間だった、エフエム上越では、災害対策本部からの情報とは別に、独自に学校・園に連絡して学校の状況を把握、子どもの帰宅方法を確認し保護者に迎えに行くよう放送を通じて連絡した。特に保育園や幼稚園、小学校低学年の保護者は心配したそうで、放送を聞いた同僚から迎えに行くよう促され、ありがたかったという話もあり、この放送は後日感謝いただいた。

地震の受け止め方は、被災した場所・状況により個人差がある、鳥瞰的に、さらに短時間に状況を見渡せない限り全容は見えない、災害対策本部の正確な情報収集には時間がかかる、初期の段階では狭い範囲の助け合いが重要であり、防災リーダー的な存在も必要だ。

ラジオで早く正確に情報を伝えるためには、入ってくる情報が信用出来るかどうか確認しないですぐ出せることが重要である、本部発表は問題ないが、一般からの情報はデマの可能性があるので確認する。

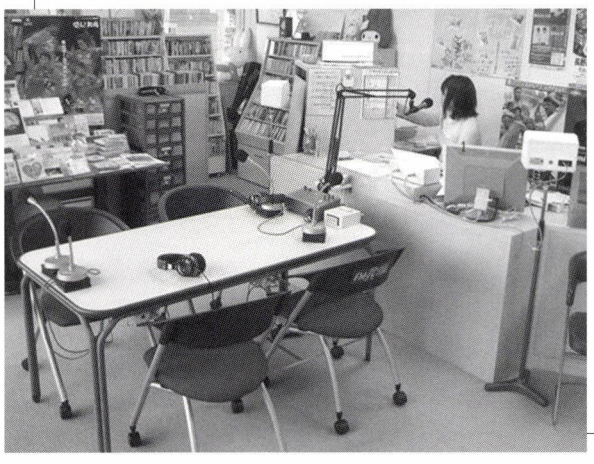
イザというときは、皆が特派員という感覚で情報がいただけるとありがたい、そのために「災害特派員」などの名目で名前を登録する方法が考えられる、自分のため・隣組のため・市全体のために情報を伝える人である。

今年七月にも地震が起きた、本当に災害はいつやって来るか分からない、この日は「海の日」で祝日、学校が休みだったのは幸いだった。

お昼の生放送開始四六分前の地震。情報収集と同時に放送では、中越大震災を受けて、日本コミュニティー放送協会が制作した地震直後に使えるCDを流した。「揺れている時」「揺れが収まった時」など状況に合わせて使えるもので「火の取り扱い」「行動上の注意」などが、落ち着いた女性の声で録音されている。スタジオ内は小物がひとつ落ちた程度、ガラスの向こうに見える大町の家も大丈夫。しかし、三年前の経験から「見える所だけで状況を判断してはならない」上越市内全部が大丈夫だという保障はない。十一時の生放送までは、家が倒壊・半壊したことを想定しこのCDを流した。柿崎区・吉川区・三和区では役に立ったはずだ。

地震はいつ起こるかわからない、我社のわずかなスタッフでは取材はままならない、災害対策本部からの情報だけに頼っていいだろうか、被害状況を伝えるのも、必要な物を要求するのも当事者の自分達でやってみてはどうか、今欲しい情報をラジオを使ってやり取りする、ラジオにはその能力がある。

エフエム上越㈱
会社所在地　上越市本町三丁目2・26
雁木通りプラザ内（旧高田市役所在地）
資本金　五千万円（代表取締役 田中弘邦
従業員8名）
周波数　76・1メガヘルツ
アンテナ所在地　金谷山展望台横
（出力20ワット）
受信エリア　久比岐平野全域
（約8万世帯20万人）

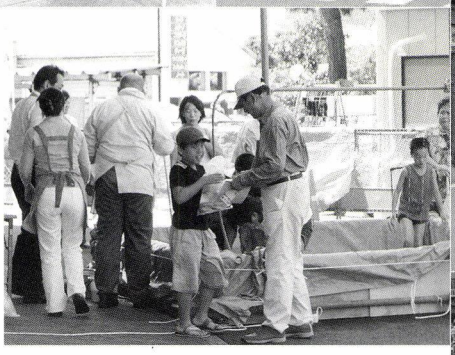


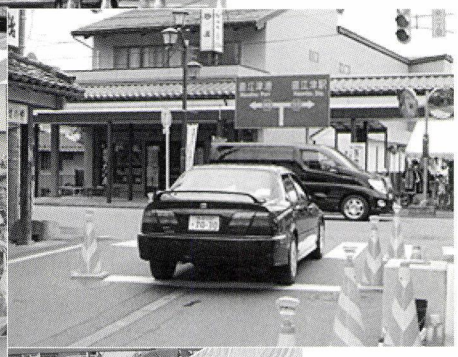
カメラの眼

この秋のまちなか



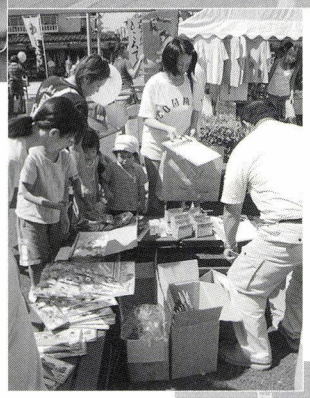






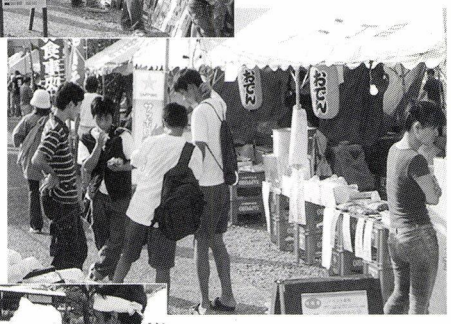
安国寺通り社会実験

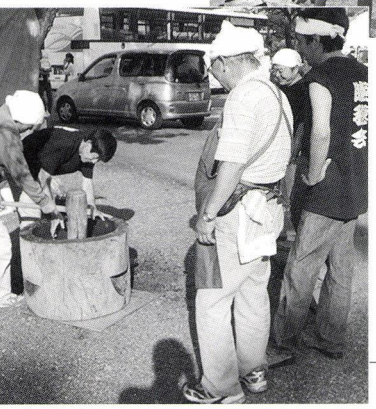
8月31日から9月9日まで、安国寺通りを駅前通りに向って一方通行にする実験が行われた。車線を減少させて通りをモール化し、まちに賑わいを創出しようという計画のための実験。これに合わせて、互の市広場でイベントが行われた。











賑わいをとりもどす高田別院おたや



SLがやってきた









花ロード

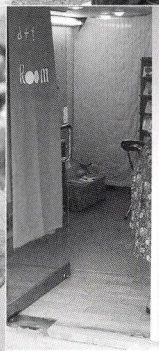


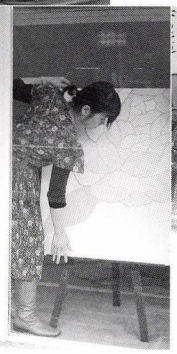












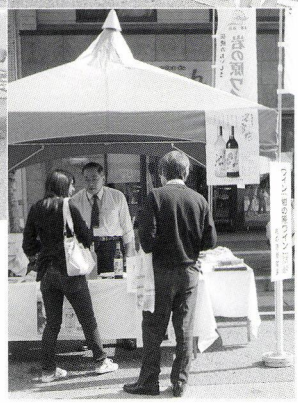


アート商店街
in直江津

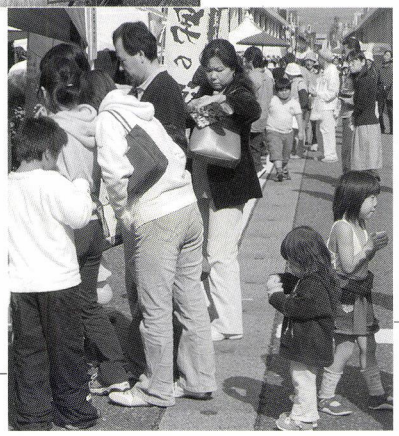
第2回 越後・謙信











SAKEまつり
2007

まちの記憶を大切に
安国寺公園



安国寺は、足利尊氏・直義兄弟が夢窓疎石の進言を入れ、元寇の役以来の戦没者の霊を鎮めるために一国一寺の寺として建てられた。越後守護上杉房定・房能父子の庇護を受けて、越後の三大刹に数えられ、尭恵の「北国紀行」や万里集九の「梅花無尽蔵」にもその名刹ぶりが記されている。

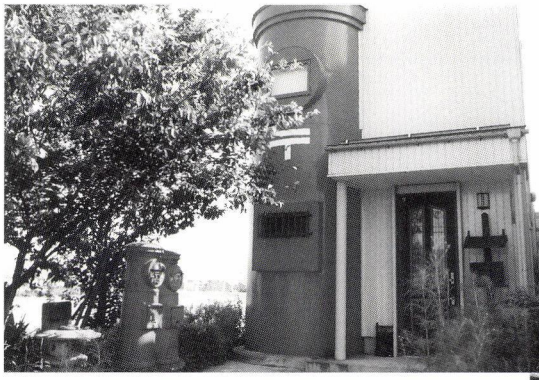
長尾為景によって守護上杉房能が殺害される永正の乱（1507）で失われ、上杉景勝の会津移封によって廃絶した。直江津駅構内の造成時、夥しい陶磁器の破片や五輪塔が出土した。

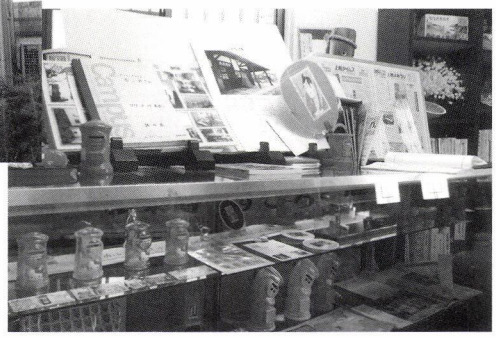
町名は西本町1・2丁目と変わっても土地の人は今も「安国寺町内会」と呼び、記憶を止めようと公園の名前とした。

投稿

「ポストの家」

佐藤とみじ





「……二階建て大きなポストがありますよ。それが目印ですから」

電話の案内にしたがって車を走らせる。来て見ると、なるほど巨大なポストが立っているので仰天した。

隣に別棟で母屋風の家屋があり、案内を乞うと六十年配の紳士が現れた。

この方が佐々木雄二さんであった。

日本郵趣協会会員で、前島密記念池辺郵趣会会長の肩書き。三年前に定年を二年余して数学教師を退職。勇躍して「長年の夢」だったホームギャラリー「ポストの家」（筆者が付けた仮称）を完成させ館長におさまった。

館内は、おびただしい数の珍しいポストが展示されていて、まず目を引く。

また、寅さんシリーズの全ポスターをハガキにした作品や一銭五厘の召集令状、明治天皇崩御による年賀欠礼ハガキなどが所狭しと陳列してある。

もちろん、小学三年から集めたという本命の切手は、コレクターの間でも高いレベルの品々がずらりと展示されている。

加えて、前島密の資料を始めとして、切手、郵政関係の各種一級史料がそろっており、母屋には江戸時代の「すごろく」の展示もある。

そんな中で、私の目を引いたのは前島密の自叙伝『鴻爪痕』の初版本だった。

たまたま、同じ町内の郷土史家の先生から『鴻爪痕』をお借りして読んでいる最中だったので、いっそう興味を惹かれるのであろう。

『鴻爪痕』のなかで、戊辰戦争の長岡藩士河井継之助との挿話をはじめて知った。

上野の山に立てこもる彰義隊へ、大将として長岡藩の豪傑河井継之助を連れてきてくれと、寛永寺の管主を介して懇請される話が書かれている。前島は、この時代錯誤の依頼を逆手に、牧野長岡藩主や河井に恭順を説こうとするが、翌朝、西軍の砲撃が始まり、時すでに遅かったのである。

また、前島が薩摩藩の藩校教授を辞するとき、後任に長岡藩の逸材鵜殿団治郎を推薦し、二度も長岡を訪れて口説いたが、鵜殿はすでに幕府目付役に就任が決っており、これまた空振りとなった。

「歴史にイフはない」と言うが、この二つの事柄が実現していたら、戊辰戦争への影響はいかがなものであったかと、歴史探訪漫遊子の妄想は広がる。

明治の元勲大久保利通の政務次官的存在だった前島密の大物ぶりを物語るエピソードではある。

新たな観光名所

観光都市上越市としても、池辺の前島記念館とペアで、この新しい形の観光スポット「ポストの家」を観光名所として喧伝したらどうか。「ポストの家」の発展を心から望む。

（上越市春日野在住）

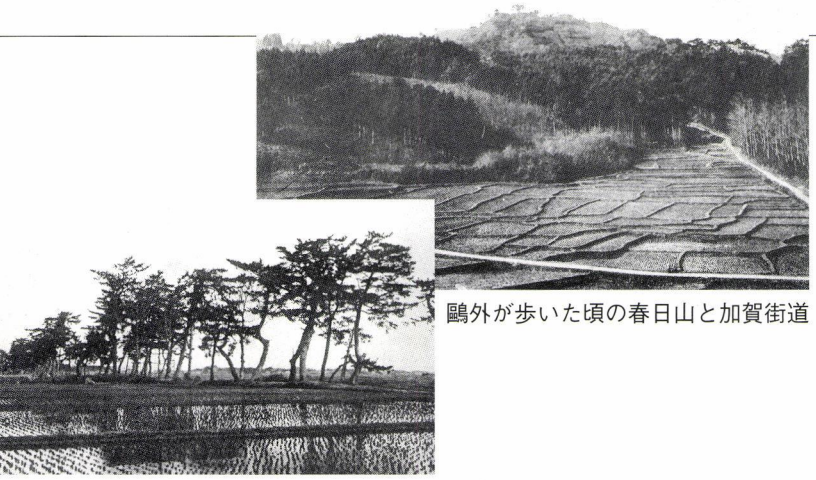
所在地　上越市大和三－一四－二一

電話　五二四－五六六一

文学の旅

高田・直江津・柿崎　上越市

「北游日乗」の旅「山椒大夫」の道



鷗外が歩いた頃の春日山と加賀街道

二十歳の陸軍軍医森林太郎（以下鷗外）は、明治十五年三月三日から八日まで、第一軍管徴兵副医官として高田に滞在している。

明治六年に徴兵令が布かれたが、それより先、四年に下士官を養成する下士教導団という機関が設置され、その募応者の身体検査に医官として栃木、群馬、長野をめぐって新潟へ赴く途中のことであった。

森鷗外は文久二年、津和野の藩医の家に生まれ、東京帝大医学部を卒業、明治十四年陸軍軍医になっている。高田滞在はその翌年のことである。

壬午の歳（明治十五年）二月十三日官事にて北越へ往かむとて人々と共にいで立つ——

と書き出される「官事」の旅は「北游日乗（ほくゆうにちじょう）」と題された日記として残されている。

汽車の旅は、十年後の明治二十六年、信越線開通まで待たねばならなかったから、鷗外一行は徒歩の旅であった。

二月二十四日に川の水も凍りつく碓氷峠を越え、軍務を遂行しながら長野を経て三月三日、雪中の関山から高田に入る。

「北游日乗」には、

三日　高田に着きて三友館に宿ると記し、七言絶句が付されている。

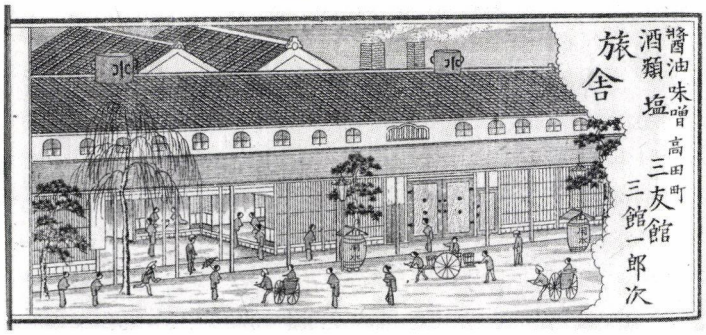
宿の「三友館」は、大町の工藤病院のあたりにあった。当時の館主、三舘（みたち）一郎次の養父は東京京橋に骨董店を経営し、上野公園内に「常盤華壇」という有名料理店も経営する人であり、一郎次も後に鹿島組の鹿島岩蔵と図って、多くの文人墨客を滞在させる「香嶽楼」を赤倉温泉に開いている。三友館は岡倉天心も泊まるなど、当時、高田屈指の宿だったようだ。

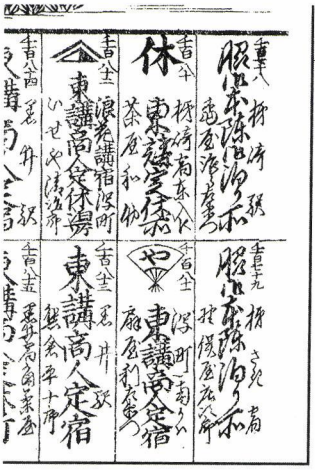
詩は次のようなものである。

不見草芽侵砌生　京城柳色最關情
風雪滿天車馬絶　人在家々檐下行

（三月だというのに）道の敷石は凍りつき、石の隙間から芽を出す草も見当たらない。京

三友館（北越商工便覧）





野俣屋（下段右端）
江戸時代に作られた旅のガイドブック「東講商人鑑」（あずまこうあきんどかがみ）に「千百七十九　柿崎宿　脇本陣泊所　野俣庄次郎」とあるが、今はない

城（東京）では柳の芽吹きのころであろう。気にかかることである。（高田は）天を覆うように雪が舞って車馬の往来も絶え、人々は雁木の下を行く。と、雪中を行軍してようやくたどり着く。夕景であろうか、雪の高田の景色を詠っている。

鷗外は七日まで軍務に当たり、

八日　高田を立つ道の上なる雪少しく融けたり

と、今日の宿、柿崎を目指して歩みを進め、左のような五言古詩を詠んでいる。

吾發高田驛　逶邐入山隈　天寒雪沒踝
路嶮汗滿顋　馬駄行客去　魚上婦肩来
乍聽濤声怒　駭眙海天開　遥島留陳迹
荒陵存餘哀　佐州何處是　孤鶻飛不回

高田を発つと、道は山すそを緩やかに曲がりくねりながら続いている。厳しい寒さだが、踝まで雪に埋まるような悪路で、汗が顎を滴り落ちる。旅人を乗せた馬が通り過ぎ、荷を背負った魚売りの婦人がやって来てきて、すれ違っていく。突然、怒り狂ったような波の音が聞こえ、驚いて目を上げると、鉛色の空の下に荒波が逆巻く冬の海があった。この海の遥か彼方に遠い昔の歴史を留める島がある。（順徳帝）の陵（みささぎ）は荒れ果てているのであろうか、（荒波を眼前にして）哀れを誘って余りある。その佐渡島はどのあたりであろうか。大鷹が寒風に舞って飛び去った。

三月とはいえまだ荒涼とした日本海の寒風の中を歩き、

直江津潟町を過ぎ柿崎なる野俣屋にやどりぬ

と、この日は柿崎に泊まり、翌日は晴れていたのであろうか、佐渡の方向に帆影を見ながら柏崎へと旅立っていった。

鷗外が歩いた高田からの道筋は、詩から想像できるように、北国街道の追分を右にとる今町道ではなく、左に曲がり、春日山を望みながら加賀街道を歩いている。すれ違った「担ぎの女子衆（おなごしょ）」の荷の中にはどんな魚が入っていたのであろうか。

一行は北風に向かって歩みを進め、当時は未だ五智街道は開かれていなかったから、浜善光寺（十念寺）に向かって砂丘を登り、右に曲がって、波音を聞きながらしばらく行くと、冬の荒海が目の前に飛び込んで来たことであろう。

「直江の津」を舞台にした説経節「さんせう太夫」に材を採ったという、鷗外の名作「山椒大夫」は秋の夕暮れだが、この日の印象が、

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群れが歩いている。

という、この物語の冒頭の景観に投影されたのであろう。

参考
「森鷗外全集」第三十五巻　岩波書店
「山椒大夫・高瀬舟」　岩波文庫
森鷗外『北游日乗』の足跡と漢詩　安川里香子　審美社
高田摘誌　村山和夫　北越出版
注　漢詩の読みは安川里香子の訳に拠った。

建物さんぽ　その八

古き革袋に如何なる美酒を？

高田の仲町三・四丁目といえば《ネオン耀く夜の街》、つまり殿方御用達の歓楽街であった。「子どもの行くとこじゃない」と言われたし、学区が違えばわざわざ通ることもなかった。今でもバー、スナック、ナイトクラブから居酒屋まで軒を連ねる。

高田城下の時代、そこは田端町と呼ばれて海産物の独占販売権を握っていた。また桶屋町や大鋸町といった旧町名からもわかるように職人町でもあった。明治になると食品製造業、仕出し料理店、割烹の町へと衣替えし、劇場も建ち、娯楽の中心街となった。芸者を呼ぶ座敷のある高級料亭がいくつもあり、饗宴接待の空間と文芸サロン的な自由闊達の時代がそこにあった。その「古きよき時代」を語る証拠物件が残っている。

その代表選手が「宇喜世」である。

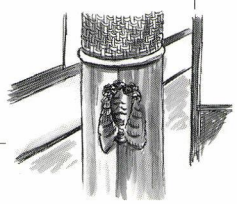
外観は萱葺きの東門に朱塗りの欄干、室内は水車の歯車と轂（こしき）が随所にあしらわれ、銘木奇木の床柱に花鳥風月が飛来する。螺鈿、沈金、透かし彫り、錦鯉のうねる池庭。「禁断の豪華絢爛数奇屋バロック」、庶民には無縁の別世界が展開する。建築史家藤森照信は言う「日本の伝統建築で派手で大衆受けするのは、日光東照宮と遊郭。彫塑的で賑やかな日光のネオバロックに対して、数奇屋好みの変種で絵画的な華美意匠の集大成が島原の角屋」。宇喜世もこの系譜の末に連なる。

饗宴と文芸サロンの主役は地元名士と接待客という典型的な男の世界であった。女は女将と仲居と芸者。座敷の趣向、宴席の顔ぶれと席順、駈引きと万歳三唱、顧客と贔屓の芸者、料理よりも酒と酒肴。世俗小説に登場する世界が繰り広げられ、時の市長の鶴の一声で、あの地下通路建設もお許しが出たのだとか。戦前の地方都市にはままあることだったかもしれない。

接待饗宴の需要は翳り、婚礼は無国籍のチャペルと張りぼての舞台装置に流れると、老舗料亭は冬の時代を迎え、「古きよき時代」への郷愁に浸るどころか生き残りに汲々となる。

ところがその一方で、婦人雑誌が描くハイソなカルチャー趣向、眼福のセレブランチに教養と感覚を鍛えられた「女類」は、本物の非日常世界に我が身を置くことを着実に実践しようとしている。

時代を物語る塗りの膳と器は「およばれ」の席。量よりも質。一期一会の美意識。本物の食材は、料理人の感性と手間が味わいを深める。床の軸の由来を目利きに学び、北村四海の彫刻欄間のモチーフを探る文化論。博物館やカルチャースクールに行かなくても、高田の文芸サロンでもあった、ここ宇喜世では自己を磨き癒すことができる。その素質は充分にある。



「古き革袋に新しい酒を盛ると袋が破れる」とは「旧約聖書」の言葉。今は新しい内容を盛ることを促す意味にも使われる。時代の流れの中で、かけがえのないよきものを生かすために、古酒であろうと新酒であろうと、それが美酒に生まれ変わることを願うばかりである。

夕暮れ、本町から歩めば三之辻橋、仲町のネオン、寺町踏切、長養館の黒板塀、寺町浄興寺に至る道……。



北村四海　明治四年、宮大工・彫刻師の北村喜代松の子として生まれる。父子は生地の市振や鬼無里を中心に腕を振るうが、四海は大理石彫刻を目指しパリに渡り、日本の大理石彫刻を切り拓く。宇喜世の欄間彫刻は四海の作品。

文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

上越信用金庫　上越産業振興研究所レポート

さよなら寿司

所長　横山由雄

「さよなら寿司」

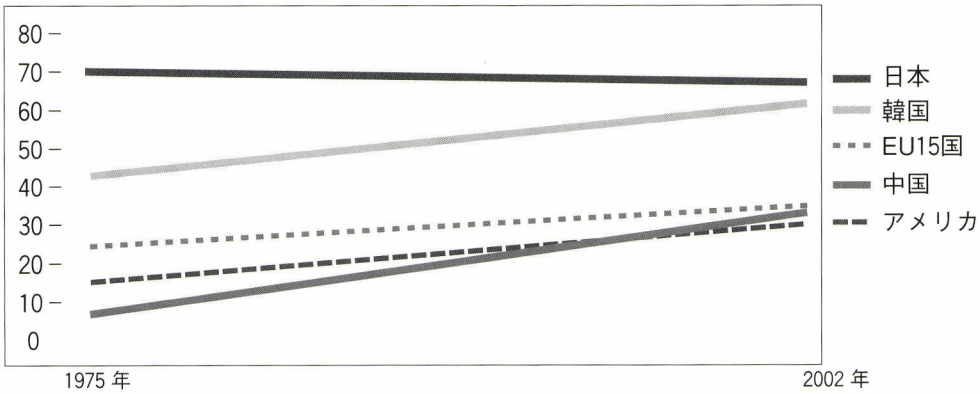
二〇〇六年十一月、「Sayonara Sushi」と題したニュースが世界に発信されました。科学雑誌『ネイチャー』に掲載された「二〇四八年までに世界の海産食品資源が消滅する」という論文がニュースソースです。カナダ・米国などの研究者からなる国際研究チームが海洋生態系の破壊に関する新たな研究を発表しました。研究を率いた海洋生物学者ボリス・ワーム氏は、海産食品をどんなに食べたくても食べられなくなるの間違いないと言います。

少し前まで、寿司は祝い事がある時くらいしか口に入りませんでしたが、まわり寿司などで随分と気楽に食べられるようになりました。庶民にとっては誠に「いいやんばい（塩梅）」です。一方で若者を中心に魚離れが進んでいると言いますが、日本人一人が一年間に食べる魚の量は六五キログラムで、今なお世界一です。

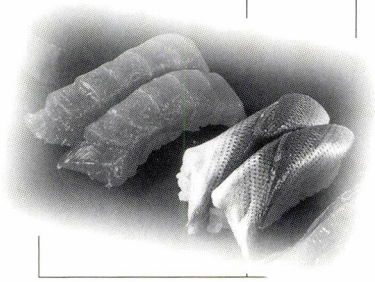
「マグロが食べられなくなる」のか

最近のニュースでもよくマグロの漁獲制限が報じられ「トロが食えなくなる」と笑い話のように語られていますが、事は笑い話の段階をとっくに越えています。私達が外国産の高級魚ばかり食べているうちに、世界一の技術を誇った日本の漁業がすっかり衰えてしまったからです。一九四九年に一〇九万人いた日本の漁業従事者のうち八十七万人が漁業を辞めてしまいました。今は二十二万人まで激減しています。しかもその多くは高齢者です。

世界の一人当たり食用水産物年間消費量の推移



＊世界では水産物の需要は旺盛
〈ＢＳＥ・鳥インフルエンザ問題、健康食ブーム、中国の所得向上〉
＊日本と世界の需要にギャップ（日本が魚の買い負け）





直江津海岸での地引き網（大正時代と思われる）

直江津漁港



かつて直江津は漁師町だった

明治の中頃の直江津では、水産業者は戸数にして六〇〇戸、人口が一四一一人でした。町村制施行時の直江津町は全戸数一九九〇戸・人口八六七二人でしたので、全戸数のほぼ三分の一、総人口の十六％が漁業者だったことになります。（「上越市史」に拠る）

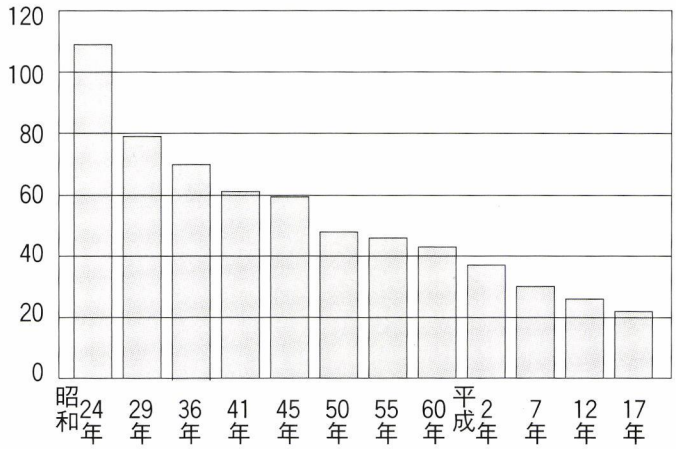
そのうえ、水産物の売買に従事したのが六〇〇戸・一二四〇人で全て専業でした。内訳は生魚商五八〇戸・一一六〇人、四十物（あいもの＝塩魚類）屋一〇戸・四十人、肥料屋一〇戸・四十人。当時の直江津町における全戸数の六割、総人口の三割が水産業で暮らしを立てていた計算になります。

漁業の衰退

ところが、直江津の漁業従事者は今では三十一人にまで減り、柿崎・大潟・名立を加えても八十二人です（平成十七年）。糸魚川・富山などでも同様の状況が見られます。いつの間にか日本の業魚は、存続の危機に直面しています。

「トロが食べられなくなる」だけで済むならまだマシです。あと二十年もしないうちに日本の地方漁港の多くは立ち行かなくなってしまうのではと心配です。

漁業就業者数の推移



世界の魚食ブームと魚の輸入

年七八〇万トンを食べる日本は、生産量が五七二万トンですから輸入せざるを得ませんが、これからは輸入も難しくなるかもしれません。世界で魚料理の人気が急上昇しているからです。欧米では肥満や生活習慣病予防のための健康食として肉から魚へ転換する人が増え続け、BSE問題がこの傾向に拍車を掛けているといいます。

人口十三億人の中国での所得向上は、二十年ほど前に比べ魚食水準が五倍以上に急増し

ています。世界の漁獲高は急激な右肩上がりを続け、半世紀前は二〇〇〇万トンだったのが、二〇〇四年には一億五〇〇〇万トンまで激増しています。

国産ものも輸入ものも食べられなくなる

世界の漁獲高激増の反面日本は一時期（一九七二年～八八年）世界一の漁業生産量（ピーク一二八〇万トン）を誇っていましたが、現在は六位まで下がっています。一〇〇%を超えていた水産物自給率（つまり輸出していた）は五〇%台まで下落しました。

国際魚市場では日本が世界ナンバーワンの買い手として、安く大量の魚を買うことができたのですが、ここ二、三年はヨーロッパや中国が高く買うようになりましたので、日本の商社が「買い負け」する場面も増えています。もはや魚は、いつでも誰でも安く食べられるものではなくなったということを自覚するときが来たようです。

魚食を維持する漁業の建て直し

日本漁業の衰退傾向は少なくても二十年前にははっきりしていたはずです。それ以後、現状に対して将来を見越した漁業者育成への投資を怠ってきたことが大きいと思われます。今後も有効な手立てが取れないとするなら、海から魚が消える心配より先に、日本の食卓から魚が消える日が来るかもしれません。

改めて問われる「海の魚は誰のもの？」

バランスの良い魚中心の長寿食文化を守り、上越沿岸の漁業衰退をおしとどめるため私達は何を考えたらよいのでしょうか。

まずは、魚を日本人の共有財産であると考えることが入り口になると思われます。

日本は魚を「無主物（むしゅぶつ）」だとしています。つまり「無主物は所有の意思をもって占有することによって、その所有権を取得する（民法第二三九条）」のです。海にいる魚は先に獲った人の物ということですがこの考え方はもはや世界では通用しません。国連海洋法条約では「人類の共同の財産」と明記され、日本も九六年に批准しています。EUは「われわれの共有財産の一部である」としています。漁業資源は日本人の共有財産であり、皆で守っていかなければならないとの認識に立てば、激減した漁業者の窮状を救う手立てを考え、漁業への新規参入を広く認めるような漁業活性化を推し進めていく道も開けると思います。

魚は皆で守るべき貴重で希少な共有財産であるとの世界常識に沿い、魚食が欠かせない日本の長寿食文化に思いをはせ、私達も魚の食べ方を少し改める必要があるのでしょう。

参考「上越市史・通史編5」近代

新企画

上越後（かみえちご）のかたち

「地域学」と言う言葉が定着し、上越にも「上越学」が生まれそうです。上越に限らず、その魅力的な語感だけが先行し、「地域ブランド販売戦略会議」ではないかと、疑うものが多いのも事実です。

小誌は来春から「上越後のかたち」を考えていこうと企画しております。

一国一寺の国分寺は、それが置かれた越後国府はどこにあったのか。上越では支配者が替わるたびに、なぜ前政権の拠って立つ基盤「城下町」を踏み潰すようにして移動しなければならなかったのか。

高田が時を経ずして、城下町からいかにして近代都市に変貌し得たのか。直江津港の近代化への苦悩はどうだったのか。

上越市は三十余年の積み重ねの中で、高田・直江津という抜き差しならぬ関係を解消し、一つの歴史を構築し得たのか。

三方を山に囲まれ、北は海に開かれた上越の風土がもたらすものは何か。

それら上越後の「かたち」を検証して、私たちの「今」にどのように反映し、反映させるかという、本来の「地域学」の足がかりとして、企画いたしました。

■読書びと



石の肺
佐伯一麦著

新潮社
一四〇〇円（本体）

いまは天上の人となった倉橋由美子は終生私小説を排し、言葉を紡ぎ時空を超えた万華の物語の世界にこそ、人の世の愛と国の姿の本来を描くことができるとそのスタイルを貫いた。

彼女と、そして我が池澤夏樹が偏愛し手本としたロレンス・ダレルの『アレキサンドリア四重奏』（今春、三〇年ぶりに河出書房より復刊）を引くまでもなく文学の醍醐味はそこに極まれる。近年かたちを変えて藤沢周平や高村薫が、人の倫理と慰めの在り場所となっているのも、私たちのこの時代が〈成熟〉という新世紀のキーワードを反芻しているのだと感ずる。

そしてその一方、近くてそして遥かな東北の地でいまでは稀有な〈私小説〉を書き継いでいる一人の小説家がいた。

佐伯一麦（さえきかずみ）（本名は亨）は一九五九年仙台市に生まれた。仙台第一高校を卒業間際に上京、四年間の週刊誌記者時代を含めさまざまな仕事を渉り〈フリーター〉の傍ら習作をつづける。若くして結婚、三人の子どもの誕生、本書の背景ともなる〈電気工〉としての労働の毎日のなか、突貫工事の改修現場で運命のアスベスト曝露に遭遇する。同時期に二十五歳で、困窮の中で出産風景に立会う青年を描く『木を接ぐ』で海燕新人賞を受け作家デビューをはたした。

工事人と私小説作家の両立を貫いた長く続く不遇な時の果てに、『ショート・サーキット』や『ア・ルース・ボーイ』で文学賞を連続受賞するも、アスベスト禍の後遺症に苦しみ仙台に帰る。三五歳の時に再婚、小説家の〈斎木〉とその妻の草木染作家〈菜穂〉が様々な人と出会い、助けられながら日々の暮らしを営んでいく姿を『遠き山に日は落ちて』『鉄塔家族』の長編に綴り続けることで再生を得た。そして佐伯一麦渾身のノンフィクション『石の肺　アスベスト禍を追う』は二〇〇七年二月に上梓された。

石綿＝アスベストはギリシャ語で〈永久不滅〉の意味で、古くからその存在が知られ、近年産業用資材として大量に使用される。七五年には有害物質として制限が始まるが最近まで出荷は続き、クボタ旧神崎工場の周辺被害が明るみとなるまで国の責任が問われることはなかった。現在は毎年千人の悪性中皮腫の死者は、潜伏期がピークの二〇四〇年には三千人に達する事実。

八五年に刊行された広瀬弘忠『静かな時限爆弾　アスベスト災害』（新曜社）に啓発されたことにより早くこの問題に同伴してきた佐伯が諦念を破り、国家賠償訴訟や治療の現場を辿る。

村上春樹がサリン事件と取り組み、池澤夏樹はイラクの村を歩いた。作家のルポルタージュ、同時代との係わりをどう受け止めるかは、彼らの〈物語〉を大切にする者にとって重い課題だ。

「ぼくの肺には、永久に光る粉が刺さっている。」という衝撃的なコピーを纏った『石の肺』は、作家自らが発症したこと、そして自身の来し方、生活を幾重にも〈私小説〉に定着させてきた佐伯が自伝を手記として書く、その微妙な重層感により特異な作品となった。

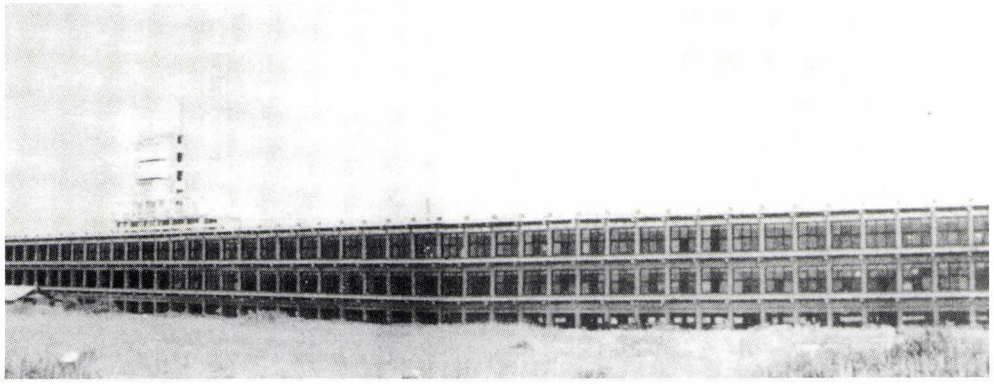
悪性中皮腫でスティーヴ・マックィーンがこの世を去ったのは、レース用の耐火服に使われていたアスベストが原因だった、テレビの人気番組「劇的ビフォーアフター」は解体時の飛散問題で見直された、など身近な事例が語られる。

厄災救済の手助けを待つ、劣悪な環境でともに汗を流したかっての仲間の現場作業員への「祈りに似た思いもあって、ぼくはこの本を書いたのです。」とその文を結んだ佐伯一麦。

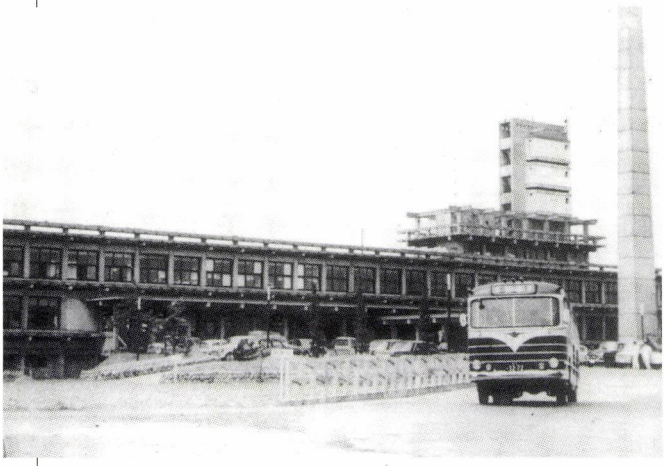
染色作家としてノルウェーの美術大学に留学した妻と共に過したオスロの一年間。時と人による精神の甦りを書き記した最新作『ノルゲ』（講談社）を染み染み繙き、脊梁山脈の彼方より吹いてくる佐伯の想いに浸りたい。（津）

アルバムの一枚

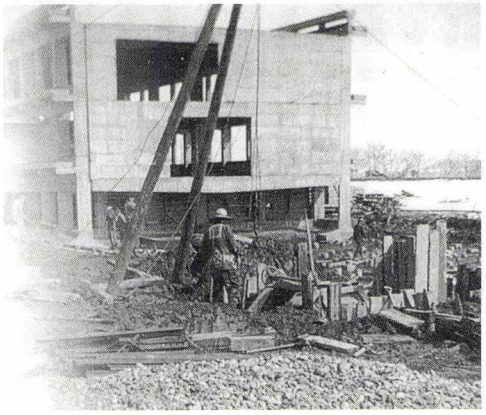
航空母艦と呼ばれた病院



南側から見る　手前はアシが茂る川原だった



給水塔が艦橋のように見える



建物北側の工事現場

新潟労災病院は昭和三十三年、病床数一一二床（三五年・二五〇床）で開院しました。

外観は何の装飾もない打ちっぱなしコンクリートの二階建て（実際は三階に見える）、長さ二二〇メートルの屋上に、まるで艦橋のように四角い給水塔が乗っているため、航空母艦という異名がありました。

設計は渡邊洋治です。彼の作品には、東京の大久保に「軍艦マンション」呼ばれる作品もあり、その独特の作風は海軍時代の　だとも言われています。

渡邊洋治は大正十二年、大工棟梁の子（祖父は「いかや八角塔」の棟梁）として直江津に生まれ、高田商工学校木材工芸科（高田工業高校・上越総合技術高校）を経て日本ステンレス直江津工場に入社し、戦後は建築家を目指して上京、久米建築事務所に入ります。苦学して独学で建築士の資格を取り、後には早稲田大学で教鞭を取って多くの有能な建築家を育てることになります。

屋上のあまりの広さに驚いた人も多いと思いますが、館内は無機質な外観とは違って落ち着いたシックな雰囲気で、病院らしさを感じさせないものでした。平成九年、改築のためとり壊されました。

彼の作品は市内では、国分寺近くに合掌造り風の家、加賀街道沿いに斜面に沿った「斜めの家」などがあります。

狂気の建築家とか異端の建築家と呼ばれた渡邊洋治は、昭和五十八年、六十一歳でこの世を去りました。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

本誌秋号の「産業振興研究所レポート」はあちこちで反響を呼んでいるようだ。しかし、ほとんどのマスコミがＬＲＴ(軽量軌道交通)を「次世代型路面電車」と訳しているため、本レポートが誤解されて読まれている向きもあるようだ。誤解を与えないよう、かつ過不足なく情報を伝えるのは大変難しい。研究所では、今後も新幹線と並行在来線の活用についての考察を継続するという。

「ポストの家」の投稿ありがとうございました。前島記念館と一緒に巡る観光も考えられます。

「この人に学べ」は紙面の都合で休載しました。

第８巻１号　３月１日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」冬号
第七巻四号　通巻二十八号
発行日／平成十九年十二月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三－九－五
〒九四三－〇〇八二
TEL〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十九年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・太田均



頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)